

報告

佐竹家 260 年展の展示内容について

太田和夫

1 企画と意義

有史以来、秋田はさまざまな変遷を経て現在にいたっている。17世紀に入ると、徳川家が江戸に幕府をかまえ日本全国を治めるにいたった。秋田には、常陸より佐竹家が移り支配権を握った。これより明治に移るまでの260数年、秋田は佐竹家を領主と仰ぎ藩政の歴史を歩むことになった。

当館第一展示室では、原始から近代まで歴史の展示を行なっているが、その視点は一般庶民の側からみたものであり、いわゆる支配者側からの展示は少ない。とくに近世においてはその色彩が強い。これに加え、昨今の歴史探究ブームもあり、秋田の支配者であった佐竹家に焦点をあて、200数十年も続いた藩政期を概括的に展示してみようという企画がうまれた。

次にどのような意義をもって展示を施行するかについては、(1) 秋田にくる前の佐竹家はどうかであったか。

(2) 12代続いた藩主の人となり、その時々の方針や事件と文化面の事柄。(3) 四家の分家を置き、各々に政策遂行の重要な任務を与えたこと。(4) 当時の秋田領の地理的全体像はどうだったか。…以上4項目を知ってもらうことにその意義をもたせた。

従って、展示テーマは「佐竹家 260 年」とし、中テーマは、1、秋田の佐竹家。2、藩主とその時代。3、佐竹の一族。4、秋田七郡絵図とした。

展示テーマについては、歴史という時間の流れと重みを表わすために 260 年という数字と藩主の佐竹という名前を合わせ決定した。中テーマに関しては前述の意義にほぼ一致するが、(1) 秋田の佐竹家については、調査準備期間が極めて短かったこともあり、常陸時代の佐竹を資料の面で充実させる事ができず、上記テーマに決定した。ここでは、展示全体の導入部分でもあり、まとめでもある。以下詳細は展示内容の項で述べる。

2 効果とねらいと技法

この展示に際し、次のような効果とねらいをもったつもりである。以下箇条書にまとめてみる。

1) 大きな資料(秋田七郡絵図 寸法約 6m×7m)を展示室内に設置し、展示全体の目玉のひとつとした。これにより秋田領の全体像をイメージアップしようと図った。

2) シンボルマークとして、佐竹家家紋の三種、とくに五本骨扇を活用し、タイトル、解説パネルにつけ、観客の目を楽しませよう試みた。

3) 藩主十二代の肖像画(秋田県指定有形文化財・天徳寺蔵)を、「藩主とその時代」のコーナーに展示し、各時期の区切りと、藩主のイメージを高めるために活用した。

4) 板戸絵、衝立など秋田城(通称久保田城)で使われたと伝えられるものや、武具・甲冑・調度品などで、大名の生活をおおわせるようにした。

5) 歴史の展示には古文書の数多く出る。このため、解説パネルの文章が多くなるのだが、ここでは、できるだけ少なくした。実資料だけで展示を理解させるのは困難だが、最小限度の解説文で補助した。古文書の解説等補足しなければならぬものについては、解説員にその資料をもたせ観客のサービスに努めた。ねらいは、多様な形の展示資料による雑な感じを助長しないことにある。

6) 解説パネルは紺系統のミューズコットン紙に白色の文字で、名称ラベルは枯葉色のミューズコットン紙に黒色の文字で、各々シルクスクリーンで刷り込ませ、形は方形、寸法は4段階の規格を設け統一を図った。

3 内容と展示資料

中テーマ1・秋田の佐竹家

(小テーマ) 常陸時代の佐竹家

佐竹氏は源義家の弟、新羅三郎義光を先祖にもつ名門です。12世紀頃久慈郡佐竹郷(現常陸太田市)に住み、2世隆義は平氏方となり源頼朝と戦い敗北しましたが、その後、奥州征伐に参加して所領を回復します。鎌倉末期に守護となり、北朝方の有力武将でした。室町時代一族の反乱で衰退しましたが15世義舜は一族をまとめ家勢をあげました。義宣は豊臣秀吉に接近し1591年(天正19)

江戸氏を破り水戸城に入りました。秀吉政権下の強い軍役に耐える中で戦国大名として成長しました。1595年（文禄4）の太閤検地で54万石を知行しました。（解説文より）

（小テーマ）転封のいきさつ

1600年（慶長5）、関ヶ原合戦の時佐竹氏は交友関係にあった上杉方へ援軍を出さず、一方徳川方へ積極的に味方することもなく中立をとりました。翌年、戦後の大名処分で大数の大名が改易・減封の処分を受けた中で佐竹氏は無疵でした。しかし、1602年（慶長7）5月義宣は伏見で転封の命令を受けています。理由は上杉との密約が露見したためとされていますが、実は関東での新勢力徳川氏と旧勢力佐竹氏の力関係と幕藩体制の確立のため出羽への転封は必然のことでした。（解説文より）

（展示資料）

書・佐竹義重筆、義重感状、系図（秋田県立秋田図書館蔵）、久保田城図・渡辺昌一筆、秋田城内絵図、秋田城絵図、検地竿（秋田県指定有形文化財）、板戸絵、衝立、秋田六郡絵図。

（構成）

ここは展示全体の導入部であり、またまとめの意味も持っている。佐竹氏が秋田に移ってくる前の常陸時代のこと、秋田に転封するいきさつ、藩財政、秋田城、秋田領について概括的に展示した。常陸時代については、有力な資料をもって来る事ができず、書・感状だけであり、解説文で補った。転封のいきさつにおいても同様である。城については、図面、俯瞰図、板戸絵、衝立などでそのイメージ化を図り、藩の財政面については図表パネル、検地竿等であらわした。

中テーマ2・藩主とその時代

（構成）

ここは、展示の中心部である。初代藩主佐竹義宣から12代義堯までの政治・経済・文化各方面に及ぶさまざまなできごとを表している。藩主その人については、肖像画・略年譜・直筆の書・絵画等々で示した。

具体的には、年貢の基準を示した黒印御定書、御家騒動の読本である秋田杉直物語、土地・水利・農業技術・農業経済・農政・風俗のあり方を描いている水土録図絵、商人として大きな仕事をした那波三郎右衛門祐生の肖像画、幕藩体制を否定した秋田藩主吉川忠安の紹介、藩主から家臣にあたえられる知行高と村名を記した御判紙、検地の際に使った検地竿、など多方面に関係した資料を時代順に展示した。さらに文化面では、八代藩主義敦が描いた洋風画を中心に、書・歌などを展示し、展示の流

れの中に遊びとゆとりをもたせた。

藩主及び武士階級の生活を偲ばせる調度品・武具等は時代判定の難しい資料が多く、藩主ごとに展示することが困難であった。ために、直接展示の流れに結びつかないが、その流れにうまく沿うよう適所に配し、武士の生活の一端をうかがえるようにした。飾りの要素が強いけれども、観客の目を楽ませるのに最も効果があったと考えている。

壁面パネルには、軸装の肖像画・書跡・絵画で平面的な展示を、その下の床面では、工芸資料・歴史資料（立体）で立体的な展示を展開させた。

（展示資料）

- 佐竹義宣肖像画（初代、天徳寺蔵）、袈裟（義宣が着用した陣羽織を打ち直したもの、天徳寺蔵）、幟、政景日記（県立秋田図書館）、義宣書状、家老梅津憲忠書状、慶長19年飯沢村検地帳、歌入火縄銃、指紙、黒印御定書
- 佐竹義隆肖像画（二代、天徳寺蔵）、甲冑（伝義隆所用）、慶安元年赤沢村検地帳、太刀・拵（備前国長船住景光、元応二年七月日）
- 佐竹義処肖像画（三代、天徳寺蔵）、写経（紺地金泥法華経）、梅津忠雄書、鳥之図（武田永球、藩お抱え絵師）
- 佐竹義格肖像画（四代、天徳寺蔵）、水仙之図（義格筆）、黒印御定書
- 佐竹義峯肖像画（五代、天徳寺蔵）、義峯所用文房具一式（文台、硯、硯箱、小刀、錐）、享保4年黒印高帳、今宮大学書、御判紙、森岡村高札
- 佐竹義真肖像画（六代、天徳寺蔵）、鞍・鎧（螺鈿、猿猴文）、火縄銃、御判紙、義真書状
- 佐竹義明肖像画（七代、天徳寺蔵）、御判紙、銀札、佐竹義方書、佐竹家紋入遊山弁当、三方
- 佐竹義敦肖像画（八代、天徳寺蔵）、松に唐鳥（義敦筆・秋田蘭画）、湖山風景（義敦筆・秋田蘭画）、佐竹義敦書、宝暦14年植田村打直検地帳、明和2年三又村打直検地帳、義敦書状、梅津忠致書
- 佐竹義和肖像画（九代、天徳寺蔵）、千山白雲図（義和筆）、水土録図絵、玉篇、伝義和製花入（竹材）、手文庫、達摩図（菅原洞斎筆）
- 佐竹義厚肖像画（十代、天徳寺蔵）、那波三郎右衛門祐生肖像画、関喜内父子像、御判紙
- 佐竹義睦肖像画（十一代、天徳寺蔵）、義睦書、乱箱膳・椀類、菓研、湯桶、菓子器
- 佐竹義堯肖像画（十二代、天徳寺蔵）、義堯像（プロ

佐竹家 260 年展の展示内容について

ンズ製、天徳寺蔵)、佐竹右京大夫御登絵図、加藤景琴一代日記、川原毛鉾山制札、短冊

中テーマ 3・佐竹の一族

(構成)

佐竹氏は分家を 4 箇所にもち、大館・秋田・角館・湯沢に各々配置し、藩政の保持に努めた。

ここでは、各分家のなりたちを解説パネルで簡潔に説明し、個々に関連ある資料を展示したにすぎない。分家の存在を認知してもらうコーナーとした。

(小テーマ) 南家 湯沢住

祖 義里(父 15世義舜) 1515年(永正12)生。

太田城の南に住み、そのため代々南と称しています。義種の時秋田に移り湯沢に住みました。以後、代々この地を支配しました。数代にわたり本家の名代として天皇即位に上洛しています。又、義安の奥方が公家の出であったことから角館の北家同様京風の気風が今も色濃く残っています。1855年(安政2)知行高5,500石。1848年(嘉永元)家臣数189人でした。(解説文より)

(展示資料)

南家日記、書(義和筆、郷校「時習」の字)、刀(伝元重作、秋田県指定有形文化財)、目安箱

(小テーマ) 北家 角館住

祖 義信(父 14世義治。東家の祖政義と兄弟)

1476年(文明8)生。太田城の北に住み代々北と称しています。義廉の時秋田に移り一時仙北長野紫嶋に住みます。義隣(出生は高倉大納言藤原永慶の第2子)は10才で家を継ぎ、芦名家断絶後1656年(明暦2)38才で角館に移りました。当主に京都出身者が来たこともあって京風の気風が残りみちのくの小京都とも言われる町を形成しました。

(展示資料)

佐竹義隣書、岩に牡丹(佐竹義躬筆、秋田蘭画)、北家日誌(県立秋田図書館)、打掛、膳碗一式、きのこ型酒器、朱盃、銀杯、遊山弁当、状箱、火縄銃、ギヤマン壺皿(小田野直武が佐竹義躬に献上したものと伝えられる)、オランダ絵皿、北家系図、鏡箱、瓶子、

(小テーマ) 東家 秋田東根小屋住

祖 政義(父 14世義治。北家の祖義信の兄弟)

1484年(文明16)生。太田城の東に住み、そのため代々東と称しています。16世紀末の当主義久は政治的能力に優れ、若い宗主義宣を補佐し内政・外交の最高指導者として活躍し秀吉から豊臣姓を、朝廷からは官位を与えられています。義賢の時秋田に移り六郷氏残党反乱の際、その鎮圧に功績があり、6,000石を知行しています。代々城下の東根小屋に住んでいます。1855年(安政2)知行高5,500石余でした。(解説文より)

(展示資料)

脇指(銘佐竹義富作文化十二年乙亥八月日)、銀製菓籠・湯呑、佐竹義壽書、書状四通

(小テーマ) 西家 大館住

祖 義躬(父 9世義篤) 出生不詳

那珂郡小場の城主で知行3万石余でした。義宗の時秋田に移りました。義成の時桧山城を守り、後大館に移り、以後代々この地を支配しました。義房の1658年(万治元)、宗家より佐竹の姓をうけました。1855年(安政2)知行高5,700石余、1848年(嘉永元)の家臣数248人でした。

(展示資料)

陣羽織(西家所用)、佐竹義茂書、和歌、書状

中テーマ 4・秋田七郡絵図

(構成)

展示室中央にたて約7m、よこ約6mの絵図を横におき、本展示のひとつの目玉とした。ここで当時(元禄年間)の秋田領を俯瞰する形をとり、観客にその全体像を強調した。観る人の目を強く引く大きな資料であり、細部にいたっては、村の石高など専門家にとり貴重なものである。

(展示資料)

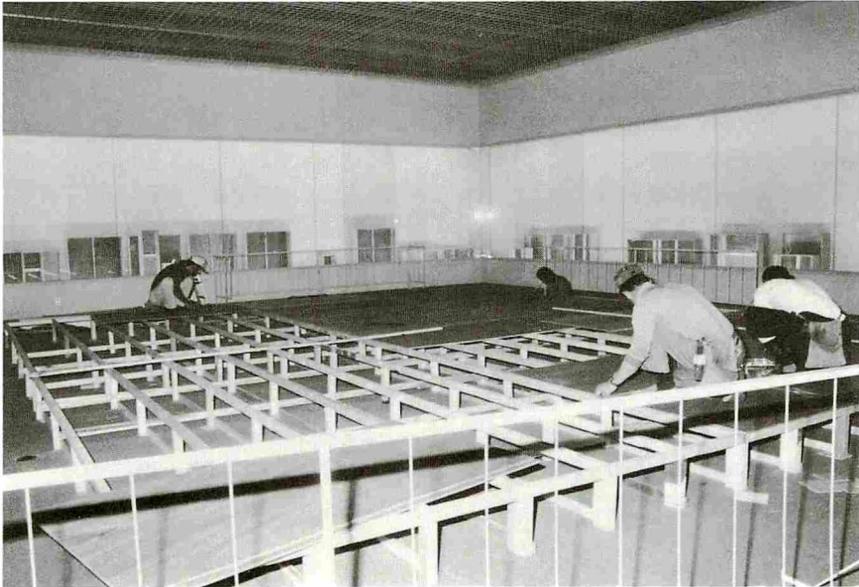
秋田七郡絵図(県立秋田図書館蔵)——元禄15年

この他、室内ののぞきケースに、歴代藩主書画卷、毛沓、軍扇、義和所用硯、硯箱を展示し、鑑賞の資料とした。

太田 和 夫



佐竹家260年展



展示作業場面